

長谷川 望牧 師

* 「主は聖霊によって宿り、おとめマリアより生まれ」と使徒信条に告白するように、マリアは男性との交渉によってではなく、聖霊が特別な力が働いてイエスを宿したのである。「神にとって不可能なことはありません。」とみ使いから言われたとき、マリアは「私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」と答えた。これがマリアの信仰である。カトリックではマリアが神の子を宿したことにより、特別な教理があつて、高く評価するが、マリアは私たちと同じ罪ある一人の女として単に「イエスの母マリア」なのである。

* マリアは言った。「私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます。(ルカ1:46~47) 「マリアの賛歌」として知られるこの箇所はマリアがどういう者であるかをよく表している。最初のラテン語のMagnificatoをとって多くの曲が造られている。「あがめる」と訳されていることばは、もともと「大きくする」という意味で、マリアは、主を特大の方として見ていた。すなわち「あがめ」また「たたえる」(元は「喜ぶ」という意味) ののである。

* その理由は、「この卑しいはしために目を留めてくださったからです。ご覧ください。今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう。」(1:48) マリアは自身を「卑しいはしため」と呼んだ。社会的に低く、経済的に貧しいという意味もあるが、この文脈の中では、神の大きさに対して自分がどれだけ小さいかを告白している。そのような私に救い主を宿すという途方もないことをされた。神の前に謙虚に振舞ったからこそ後の世の人々にまで覚えられているのである。

* 「主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます。」(1:50) 卑しく、低いところにも、また、困難や苦しみの中にも、私たちが心から神を求め、神を恐れるならば、必ず神があわれんで助けてくださる。反対に「心の思いの高ぶる者」「権力のある者」「富む者」はこの世を謳歌しているように見えても、神は彼らを引きずり降ろされる。マリアは、イエスの後4人の男の子で複数の女の子を産んだ普通の母親であつた。初子イエスの十字架、復活、昇天を見て弟子たちとともに神の愛を受けて「主のはしため」として生きたのである。